

RadioDays



ラジオデイズ

声には、
人の体温があり物語がある

月刊「ラジオデイズ」7月号 (通巻第14号)

2008年6月30日発行

【発行人】赤塚祐一郎

【編集人】大森美知子

【発行所】株式会社ラジオカフェ

東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F

Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281

http://www.radiodays.jp

7

July Edition
2008, vol.14
Free of charge

この人の声が聴きたい◎7月

二遊亭白鳥さん (落語家)

両世界落語あるいは バロック悲劇のように

「二遊亭白鳥は、『芝浜』ならぬ『千葉浜』で、早朝寄席に向かうはずの不遇な噺家を浦安の浜に立たせ、財布の代わりに朝鮮半島から飛来したとんでもないものを拾わせる。噺家はその物騒な代物を担いで東京の街を駆け回り、凄まじいスピードで展開されるナンセンスは稀代の人情話をスラップスティックコメディに変貌させていく。」

白鳥流の改作古典には、世の中のパロディにありがちな揶揄や風刺の臭みはなく、可笑と暴力に満ちた不条理劇の爽快感がある。

白鳥師匠の故郷、新潟には雪が降り積む。

少年・白鳥は、実家の自転車屋の二階で、雪に降り込められて退屈する友人たちに自前の怪談などを飽かず読み聞かせたという。

大学では童話絵本研究会(及び空手部)に所属し、卒業後は小説家を目指したが、古今亭志ん生の『貧乏自慢』に触発されて落語へ急旋回。一九八七年、三遊亭円丈師匠に入門。荒唐無稽かつシュールな新作落語を演じていたが飽きたらず、かつて親しんだ童話の世界に物語の結構を求めるようになった。ここにひとつの開眼があったらしい。

「ラジオの街で逢いましょう」第四十五回で、その事情をこなふように語っている。

「シュールな噺は自分と一部のマニアックなファンにしか分からないんです。でも、童話なら分かりやすい、誰でも知っている。おじいちゃんやおばあちゃんにも分かりやすいん



「しかし、童話と落語の結合は、この人にあつては「分かりやすさ」の獲得だけに終わらなかった。」

たとえば、『メルヘンもう半分』は、永代橋の袂の居酒屋にムーミンが出現するというまことに不可思議な怪談である。三角帽子の亭主とタマネギ頭の女将が、「もう半分」の酒をねだる客ムーミンから大金をむしりとる。この筋書きはお約束通りだが、亭主と女将がムーミン谷の住人たちへの恨み辛みを口にするあたりから、この改作古典は薄暗い情念劇へ、血まみれのバロック劇へ変貌していく(居酒屋の夫婦はムーミン谷では異父兄弟であつたはずだから、ここには兄弟婚という古代的テーマも顔を覗かせている)。

白鳥落語は、アニメや漫画の主人公を借りたよくある新作落語と一線を画している。童話と古典落語の両世界は穏やかに並存しているのではなく、無理やり結合されて歪み、軋み、悲鳴を上げている。それをねじ伏せるような猛スピードの語り爆笑を創り出す。

「落語の国」と「童話の国」。

その内部はともに平和で穏やかな世界だが、両世界の狭間には荒涼とした枯野が広がって、白鳥落語はそこをからからと通り過ぎていくような按配だ。

(ラジオデイズ・プロデューサー 菊地史彦)

ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。

飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粋と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(会費無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてを試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りを!

<http://www.radiodays.jp>

対話の街からは、内田樹のダイアログ・シリーズをリリース。小林秀雄賞を受賞された気鋭的思想家・内田樹氏と、悪ガキ時代からの盟友ラジオデイズのプロデューサー・平川克美とともに、絆々たるお客をお招きして語り尽くします。ただいまは脳医学者の養老孟司さんとの対談「概念化する世界の読み方」の第一回、音楽家の大瀧詠一さんとの対談「大瀧詠一」の第一回が無料ダウンロード中。音の旅「小糸ん・遊雀の大井川鐵道SL列車の旅」も登場です。

文芸の街からは、作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズからは、女優鳥丸せつこさんの朗読、詩人の正津勉氏がナビゲートする『詩人の愛』I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の『水仙』も新登場。さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三師朗読による江戸弁で聞く落語調「ゴリ」外巻『鼻』も新発売。詩人の小池昌代さんのコラム「言問い小路」も好評連載中。

話芸の街からは、ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源百五十本余をお届け中。時代に磨かれた古典を自家薬籠中に現代に演じきる噺家たち。そして、時代の流れから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鏗る噺家たち。ライブ音源だけに一期一会の噺に出会えます。不定期ですがラジオデイズイチオシの噺家さんの演目を無料ダウンロードにて提供していきますので、毎日覗きにきてみてください。まずは、試験ボタンを。

明烏い話

連載第15回



本田久作



お客を笑わせようと思うな。笑わせるのは誰にでもできるが、泣かせるのは難しいから、泣かせるようにならないければ、本当の腕でない。

これは今から百年以上前の噺家の芸談だが、現代の噺家や演芸ファンの中でこの言葉に共鳴する人はあまり多くないだろう。今の感覚からすればこの芸談とはまったく反対に、客を泣かせるよりも笑わせる方が難しい、というのがなかば常識とされているからである。事実、落語ファンのはしくれの一人である私もそう思っている。

ところが、この芸談を語ったのが円朝で、聞き手が円喬であったと知ると、急に手の裏を返したくなるのも落語ファンの人情だ。少なくとも私はそうだった。何しろ相手はあの円朝と円喬である。そして円喬は師匠である円朝のこの言葉を円朝の死後も忘れずに胸に秘めている。ならばやはり客を笑わせるよりも泣かせる方が難しいのか。二大名人である円朝と円喬が認めた言葉に逆らうとおそらく天罰が下るであろうが、雷に打たれて死ぬのを覚悟の前で言えば、円朝と円喬は間違っていると思える。

客を泣かせるためには伏線が必要である。三秒で客を泣かせることはできない。さまざままな仕込みがあった末に、最後の押しの一

で客は涙を流すのである。ところが笑わせるのはそうではない。「隣に囲いできたってねえ」「へえ」なら三秒だ。ただし、「隣に囲い」の小噺では実際問題として客は笑わない。だから笑わせるのは難しいのだ。泣かせるには一定のルールがあり、そのルールに則るとけつこう簡単に客は泣く。しかし、そのルールをきちんと守りながら、客にはそれと意識させず、なおかつ緊張感を保ちながら最後の押しの一言葉まで持っていくには腕が要る。小噺で笑わせるのには腕は要らない。腕はあった方がいいが、なくても笑わせることはできる。その代わりその内容が面白くないければならない(当たり前前の話だ)。つまり、泣かせるのには技術が必要で、笑わせるのにはセンスが必要なのだ。という考え方も実は間違っている。

面白い内容を考え出すのはセンスだが、面白い内容を面白く語って聞かせるのはやはり腕だ。そして現代の噺家は基本的には作る人ではなく喋る人である。『あくび指南』は抜群に面白い落語だが、かなり腕のある噺家でない限り、あれをやってもまったく面白くない。『あくび指南』を面白く語るには喋る人としての腕が必要なのだ。ならばどうして円朝は客を笑わせるよりも泣かせることを上に置いたのか。

これは時代と言うほかない。天保十年に生まれ、明治元年を迎えた時すでに三十歳だった円朝は江戸の人であって、明治の人間ではなかった。円喬は明治元年の時はまだ三歳だったから、明治という新時代の感覚を持つていそうだが、彼は八歳で円朝入門して、以来その薫陶を受けている。つまりは円喬もまた円朝の価値観を受け継いでいるはずだ。そして江戸人としての感覚からすれば、笑わせ

るよりも泣かすことの方が価値としては上だと判断したのではないだろうか。だが、その円朝も最晩年に病床の中から弟子に啞の親子の小噺を稽古してやったという。「さつき前を通つたのは源兵衛さんじゃないのか?」「いえ、源兵衛さんですよ」「そうか、僕はまた源兵衛さんかと思った」。円朝も結局のところ落語の一番の根っこはこういう軽い笑いだと思つていたのではないだろうか。

●ほだ・きょうざく
一九〇六年大阪府生、ライター。二〇〇二年の「仏の遊び」が国立演劇場日本舞集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本関係の賞を毎総ナメの業界注目の新進作家。主な受賞作「玉手箱」(国立演劇場日本舞集優秀作)、「懐の葬式」「按摩の夢」「幽霊蕎麦(いずれも落語協会優秀賞)」など

私の讀大ばなし 拾四

桂平治

『子ほめ』

き
間や口調、上下などの位置関係と落語の基本がすべて入っているので、桂文治一門では最初に教わる噺。毎年正月にはかならずどこかの寄席でかけるようにしています。初心を忘れないよう……。

『源平盛衰記』

武
ある落語会で頼まれてやって以来、持ちネタに。師匠の十八番でもあったこの噺は、時事ネタなどの入れ事も尺も自在なのが地味ならではの醍醐味。何度もやっている噺ですが、新鮮さを心がけ、新聞や雑誌にも目を通して時代を讀むようにしています。

『親子酒』

参
病床にあった師匠に稽古を願ひ出ましたが、とうとう叶いませんでした。親子の演じ分けが眼目だけに酔をとるとやり易く、童顔だった師匠も晩年に手がけた噺です。私も今はまだ噺に顔を合わせるよう努めています。いずれは年齢や顔に噺がついてくれればと思います。その時々を自分を見てもらいながら、生涯高座にかけて取り組んでいきたい噺です。

行こみぢが

女流ニツ目の修行日乗⑬



柳亭こみぢ

噺家にとって挨拶はとても大事だ。会ってまずへおはようございます、高座に上がる時はへお苦勞様です、高座を下りたらへお疲れ様でした。その言い様は噺家の心を投影する。なかでもへおはようございますは、師匠宅でも茶屋でも必ず膝を付いて言う、いわば挨拶の基本。

ある朝私のへおはようございますに師匠から駄目出しが、「お前なんで挨拶が全部終わらないうちにつもどか行っちゃうんだ? 挨拶は相手の目を見て、一番いい声で発声して頭を下げ、また相手の目を見て終わる。最後に俺の目を見ないうちにお前が横を向くのは気持ちが悪い。へおはようございますは一日の切符だ」。パジャマで襖の向こうから現れる師匠に、朝の第一声をかけるのは私なのだ。

そして稽古が始まった。連日何十回ものへおはようございます。「もつと元氣よく」、「なんか不自然」、「中居さんみたいだ」なかなかうまくできない。師匠と最初に向く目が合わず、膝歩きで師匠を追いかけたり。何日も続けやっとき合格になった。

そんな折、とある落語会で大師匠・小三治の高座を聞いた。「うちの蕪路はね、入門してきた時、挨拶一つできなかったんですよ。へおはようございますって言っても、私と目を合わせないでどっか行っちゃうんですから」

やっぱり師弟だな。

※大師匠：師匠の師匠のこと

●りょうていこみぢ

社会人生活を経て、平成15年柳亭蕪路入門。18年11月ニツ目昇進。趣味はピアノ、ギター、ウクレレ演奏。特技は日本舞踊、吾妻流名取(吾妻巻秀)。落語協会野球部・チームR所属。

●第14回

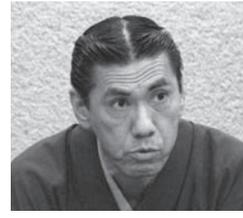
オリンピックスシンクする寄席

【日時】7月16日(水)午後6時45分開演(午後6時15分開場)
【場所】お江戸日本橋亭

古今亭志ん五

(ここんでい・しんご)

昭和四年、古今亭志ん朝に入門。五十七年、真打昇進。与太郎の志ん五としての異名を持つほど、与太郎の斬新な描き方には定評がある。近年は与太郎斬に限らず、様々なジャンルの斬に新しい息を吹き込んでいる。五十七年、花形新人演芸大賞受賞。落語協会常任理事。



古今亭志ん橋

(ここんでい・しんはし)

昭和四年、古今亭志ん朝に入門。五十七年、真打昇進。古今亭の本流ともいえる。さわやかでほのぼのとした語り口に、優しい風貌が美しよくマッチしている。観ているだけで心とむね家の一人。五十二年、つかん飛切落語会努力賞。六十年、文化庁芸術祭賞団体賞など受賞歴多数。



●第13回

ラジオデイズ落語会

【日時】7月5日(土)午後2時半開演(午後2時開場)
【場所】コア石響(四ツ谷)

龍川鯉昇

(たきがわ・りしやう)

昭和五〇年、8代目春風亭小柳枝に入門。五十二年より春風亭柳昇門下。平成二年、真打昇進。「七七年、亭号を「春風亭」から「龍川」に改める。飄々としていながらも緻密な情景・心理描写で、観客を江戸の異世界へ誘い込む。近年人気急上昇中の波に乗る噺家の一人。受賞歴多数。



三遊亭遊雀

(さんゆうてい・ゆうすけ)

平成三年、真打昇進。十八年、三遊亭小遊三門となり、独特の浮遊感と彫りの深い演じ手として活躍中。古典ネタを得意とする折紙つきの実力派。自他ともに認める鉄道ファンでもある。一八年度、国立演芸場主催「花形演芸大賞」金賞を受賞。翌年には、みごと大賞を受賞。



ラジオデイズ若手噺家の会

【日時】7月5日(土)午後6時半開演(午後6時開場) 【場所】コア石響(四ツ谷)

五街道弥助

(ごかいどう・やすけ)

五街道彌助門下。平成二年、二ツ目昇進。一七年、弥助に改名。師匠・彌助の薫陶を受け、真摯な姿勢で古典落語に取り組み続けている。端正な古典落語を演じて、高座に上がったたすまいの美しさと骨太なまは、二ツ目の中で白眉と評判。一七年、岡本マキ賞受賞。



三遊亭好二郎

(さんゆうてい・こうじやう)

三遊亭好楽門下。平成四年、二ツ目昇進。古典の骨格は変えずに、現代的な感性で落語を作り変えている。また、自身の独演会では、独自の新作落語も手がけるなど、研究心旺盛な理解派。一八年に「つかん飛切落語会奨励賞」受賞など、受賞歴多数。今秋、真打昇進が決まっている。



春風亭一之輔

(しゅんぷうてい・いちのすけ)

春風亭一朝門下。平成一六年、二ツ目昇進。二ツ目ながら、風格を感じさせる語り口に定評があり、多くの人を惹きつける。これからの落語界を担うべき噺家の筆頭格「鈴が森」などで、すでに十八番と呼べるネタを持ち、常にそれらを磨いている。一七年、岡本マキ賞受賞。



三笑亭朝夢

(さんしょうてい・あさゆめ)

三笑亭夢丸門下。平成一七年、二ツ目昇進。入門の前に新作台本公募「夢丸新江戸噺し」で、最優秀賞を受賞。それをきっかけに師匠・夢丸の門を叩いた珍しい経歴の持ち主。「いつの日か自作の江戸噺を口演したい」という思いがあるが、現在は古典落語に取り組み、精進している。



味な脇役・話芸のきまり文句

連載第14回

食



松井高志

筆者が片田舎の中学生であった頃、当然寄席などに通えるはずもないから、気の向いたとき、手軽に落語に親しむ手段としては口演を記録した本を読む程度しかなかったのだが、興津要編の「古典落語―講談社文庫」で「時そば」を読んでいて、初めて覚えた「話芸のツギまり文句」らしきものが、
ものは器で食わせる

であった。落語ファンなら多数の人が知っているように、夜鳴き蕎麦屋の蕎麦をむやみに褒めちぎる(そして、代金をごまかしていく)客が、蕎麦屋の井を褒める時に口にする諺である。この諺は六代目圓生口演の「雪の瀬川」にも出てくる。料理にはまず器が肝腎である、の意。
鼻の下に休日はない

と講談版「安中草三郎」にもいうくらいで、食えない状況にない限り、我々は毎日食事を(しななければならぬ)。たとえ世を厭うて人里離れたところへ隠遁しても、食うために木の実を拾ったり、鉄砲で鳥獣を撃つたり、なんとかして食糧を調達しなければならぬ。こうなると次第に器どころの話ではなくなる。近ごろは大食いと共にする人もいるのだが、

けっして昔からそういう傾向がなくなかったとみえて、
大食大酒は芸のうち

という諺も落語「備前徳利」のマクラにある。それによれば、明治二十年ごろの前座で立川談生という噺家が、盛り蕎麦を軽く三十ほどたいたらげる大食漢だったらしい。もちろん、腹も身のうち

という、ごくまっとうな(でも当たり前な分、ちよつと退屈な)常人向けの諺も落語「化物使い」などにはある。

●まい・たかし
一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に『人生に効く! 話芸のきまり文句』(平凡社新書)など。四月に、落語講談速記に出てくるあて字・難読語をドリル形式にまとめた新刊「コナンドク【難読漢字自習帳】(ハジリコ)」が発売された。「話芸」きまり文句辞典」サイトは <http://wagendim.coool.org/rity.com/>

本邦初! 世界初! とにかくおもしろい!! 江戸弁で聴く落語調ゴーゴリの魅力!

ニコライ・ゴーゴリの増殖する妄想と虚言の世界を東京大学教授の浦雅春氏が落語調の新しい感覚で翻訳。それを実力・人気ともに十分な若手落語家ふたりが高座斬しながらに生き生きと読みおろしました。小気味よい江戸弁語りによく引き込まれること請け合い。「ラジオデイズ」(<http://radiodays.jp>)で新発売配信中!

『外套』(I~III) 入船亭扇辰

『鼻』(I・II) 柳家三三

